

舞 たらん

VOL 71



アングル

八年目のメセナ……………メセナ八幡浜事務局長／曾我 勇 …………… 1

◎(特)集

『歴史・文化を活かしたまちづくり』

手から心へ、ぬくもりを届ける……………新居浜市／武田 信之 …………… 2

出来ることから始めよう！……………宮 窪 町／藤本 二郎 …………… 4

歴史でまちおこし……………北 条 市／竹田 覚 …………… 6

「川瀬歌舞伎盛衰記」……………久 万 町／段之上 哮 …………… 8

宇宙の平和を願う町でありたい……………宇 和 町／小田 実全 …………… 10

論談—まちづくり—

まちづくりにとっての地域学……………愛媛大学教授／讃岐 幸治 …………… 12

キラリ光るまち

「湖北の村からアジアが見える」……………滋賀県高月町／平井 茂彦 …………… 14

引き算型まちづくりの事始め (二)

内 子 町／岡田 文淑 …………… 16

トークナウ

自然は在るがままでパーフェクト！……………八幡浜市／水本 孝志 …………… 18

私のプロジェクトX……………双 海 町／関木 浩司 …………… 19

MY TOWN うおっちんぐ 歩き目デス&足ラテス

近代化遺産シリーズ「学校建築①」……………岡崎 直司 …………… 20

風おこしのちかい

小さな村のまちづくり……………浪 口 靖宏 …………… 22

研究員レポート

寒い山形で熱い人達に会う……………三好 誠子 …………… 24

「谷口がっこそば」で感じたこと……………森田 浩二 …………… 26

市民参加のまちづくりについて……………山下 大成 …………… 28

Information

まちセンからのお知らせ……………29

特集

「歴史・文化を活かしたまちづくり」

ま

今回の特集を思いついたのは、自分が今住んでいるこの地域について、他の地域の人たちに十分に語ることでできない現実気づいたのが契機となりました。自分の住んでいる地域に対する愛着（自信や誇り）は、地域の歴史や文化を学ぶことから生まれるものだと思います。

そして、これら歴史や文化の保存・活用を図るために、行政と住民が知恵を絞ることが、まちづくりにつながっていく、結果として地域を元気にするのではないかと考えます。

そこで、今回は、地域の歴史的・文化的遺産（ストック）を活かして個性的なまちづくりに取り組んでおられる人々を特集してみました。

(編集子 山下)

表紙の言葉

東予地方の祭りには、男性的で元氣な祭りが目につきます。

「継ぎ獅子」も男性が垂直に並び、一番上には子どもが獅子頭をかぶって舞うのですが、一番上に上されるまでの苦勞が忍ばれます。

江戸の火消しや、アクロバットとも違う、親子へと受け継がれるような伝統的な重みでしようか、緊張感の中にも舞を演じ切った喜びが伝わります。

柳原 あや子



八年目のメセナ

メセナ八幡浜事務局長

曾我 勇



メセナというフランス語が、日本の現代用語として市民権を得たのは、まだ十年くらい前の平成の時代に入ってからのことである。

平成二年に、ソニー、サントリー、資生堂など二百社を超える大手企業の加盟する企業メセナ協議会が創立され、企業のメセナ意識の啓発や、芸術文化に対する支援活動が組織的に行われるようになった。この頃からメセナという言葉がマスコミ等を通じて新鮮なイメージで盛んに使われ始めた。

八幡浜商工会議所が、市内の文化団体や経済団体に呼びかけて、文化のまちづくりを目指す新しい文化システムとして、メセナ八幡浜を創立したのは平成六年のことである。

メセナとは、芸術文化の支援を意味する言葉で、欧米では早くから企業の社会的貢献の一つとして、メセナ活動が盛んに行われてきた。メセナ八幡浜も、會員制の市民組織の中に、地域の主要企業や経済団体が企業会員としてこれに参加し、文化活動の支援を行うシステムであることから、あえてメセナの名称を使うことにしたものである。

それから八年、秋の美術展をメインとし、コンサート、ミュージカル、古典落語など多彩な文化事業を毎年継続して展開してきた。

行政の財政支援を求めず、会費と入場料収入だけのいわゆる民活で運営する方針のもとで、これまで何とか順調な運営を続けてきたが、最近では景気の低迷や社会環境の変化に伴って次第に運営は厳しさを増している。

転機に立つメセナ八幡浜として、新しい活路を切り拓くため、今年の秋は画期的な大事業として、デトロイト美術館展を開催することになった。ヨーロッパの印象派を中心とする近代絵画や彫刻を集めたこの美術展は、アメリカのブッシュ新大統領の就任記念美術展としてワシントンで開催されたもので、日本では、八幡浜が最後の開催地となった。

横浜などの大都市と肩を並べて、地方の小都市が取り組むこの大事業に対し、日本芸術文化振興会を始め、市の内外から暖かい声援を受け、お陰で多数の県外客を含め、期間中一万五千人を超える入場者を得て、何とか無事成功裡に終了することができた。

一粒ずつの雨が、やがて大河の流れになるように、市民一人ひとりの小さな思いを結集して誕生したこのメセナ活動が、文化面における中央と地方の格差是正の問題も視野に入れたまちおこしの一つとして、新しい方向を模索しながら今後更にしっかりと地域に根付いた活動になることを願っている。



デトロイト美術館展の会場風景

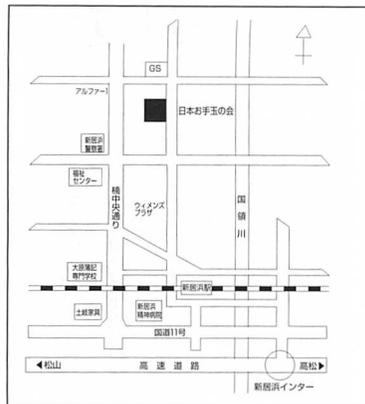
手から心へ、 ぬくもりを届ける

～お手玉の普及活動10年の歩み～



新居浜市 日本のお手玉の会

武田 信之



不況のまちの活性化を目指して

商店街の半分がシャッターを降ろした。昭和五十年代の終わりのこと。四国屈指の工都・新居浜市は、構造不況に見舞われた。そんな中、昭和六十年に、市民の手でまちを活性化しようと、十人余りの有志でボランティアグループ新居浜アメニティ倶楽部が誕生した。

「美しい自然の中で、文化の香り高い、潤いのある生活を目指す」が、倶楽部のスローガン。自然、文化、生活の三つの委員会で、活性化策を議論し実践。市民にできないことは市に提言した。その活動の一つに、お手玉の普及があった。

核家族化、少子化、IT化の時代。おじいちゃん、おばあちゃんは寂しく過ごす。子どもたちは電子おもちゃで独り遊び。お父さんは一日中、コンピューターが相手の仕事。心や肌のぬくもりの伝えあいが希薄になった。その結果、心が荒みタバコのポイ捨て、空き缶の投げ捨てにつながり、まちが汚くなっている。

新居浜発の全国行き・世界行き

日本の伝承遊びお手玉は、おばあちゃんから孫へ伝えられてきた「隔世伝承」。そこには、遊びの伝承だけでなく、裁縫

の基本、日本女性としての資質、礼儀作法、公衆道徳、歴史などを、肌のぬくもりとともに伝える世代交流がある。

いまの世の欠陥を、お手玉の普及で補うことができる。そこに気付いた同倶楽部は、県内を中心に、「三点セットのドサ回り」を始めた。世界と日本のお手玉展示、お手玉の作り方教室、遊び方教室の三点。「見る・作る・遊ぶ」の活動は、世代交流に成果を収め、予想以上の人気だった。そこで、大きな声で全国に呼びかけた。大きな反響が返ってきた。

平成四年九月、同倶楽部を中心に市内二十三のボランティア団体で実行委員会を組織し、第一回全国お手玉遊び大会を、



全国お手玉遊び大会の一場面
(小学生の部団体戦)

歴史・文化を活かしたまちづくり



「ザ祭り イン シドニー」での
市中パレード

新居浜市で開いた。同時に、お手玉の活動は全国組織の日本のお手玉の会として、新しい歩みを始めることになった。

活動は、たちまち全国に広がった。全国お手玉遊び大会は、毎年、新居浜市で開催。ことし九月の第十回記念大会には、二十七都道府県とアメリカのサンディエゴなどから八百五十人が参加した。

平成六年には、お手玉を持ってハワイに出かけた。その後は、ロサンゼルス、サンディエゴ、シドニーと海外遠征は九回を数える。日本のお手玉の会の会員も四十四都道府県に一千人に。支部は国内十四、海外四の十八支部になった。

この間に、情報誌「おてだま」を年三

回発行。平成九年に写真絵本「お手玉」を出版。十二刷になった。この本が、ロサンゼルスから、英語版「OT EDAMA」として、今年三月に出版される。ことが決まった。

お手玉のキャッチボールの教え

この十年を振りかえると、数々のドラマが浮かぶ。忘れていたお手玉を、七年振りにやってみて、「体が覚えていてくれた」と、涙を流して喜んだ八五歳のおばあちゃん。お手玉作り教室では、知らないおばあちゃんが、隣りに座った少女に笑顔で作り方を教える。真剣に縫いながら素直に質問する少女。ほほえましい様子に、いつも感動する。

自分で作ったお手玉で遊ぼうとして取り落とし、水に濡らして大粒の涙を流した少女。引つ込み思案が、お手玉の自信で克服できた少女。ライバルの長野県のおばあちゃんが、大会に欠場したのを気づいて、手紙を出した女子中学生。

オークランド空港の待合室では、私どものお手玉遊びを見て、お手玉が欲しいと泣き出した一歳半の黒人の女の赤ちゃんがいた。お手玉をプレゼントして、赤ちゃんが笑顔で交わした、無言のお手玉のキャッチボールは、忘れられない。

この赤ちゃんから、文化の交流には、肌の色、年齢、性別、国籍、言葉などの壁はないことを、教えられた。

お手玉の輪・笑顔の輪を世界に

お手玉遊びの普及活動は、第二ラウンドに入る。幼稚園、小中高校、大学など学校教育での採用が増えた。介護保険の進展で特別養護老人ホームなどでは、機能回復訓練や健康の増進に、お手玉の利用が注目されるようになった。

お手玉遊びのさらなる発展と、広がりを目指して、全国お手玉遊び大会は、新居浜市での開催から、全国各地での持ちまわり開催となる。来年の第十一回大会は、熊本県で開催される。

これからも、お手玉の情報発信は、新居浜市に本部を置く日本のお手玉の会が行うことに変わりはない。教育の現場での採用、社会福祉、国際交流、世代交流などに必要な資料の作成、情報発信、さらには文化経済も研究、実践しながら、活動を続けていきたい。

夢と心を縫い込んだお手玉で、「手から心へ、ぬくもりを届ける」活動を通して、地域、日本、地球全体を、お手玉の輪、笑顔の輪で包み、豊かな心づくりと世界の平和に、貢献していきたい。

出来ることから始めよう！

～「潮流体験」で宮窪町をPR～



宮窪町 宮窪水産研究会

会長 藤本 二郎

私の住む宮窪町は、しまなみ海道の今治側、世界最大の三連吊り橋「来島大橋」が架かる大島の北側に位置しています。かつては能島村上水軍の本拠地があり、彼らは瀬戸の速い潮の流れを鍛え抜かれた操船技術を駆使して、瀬戸内海を支配していました。その潮で育った魚は身がしまり近隣の漁場の中でも特に美味しいと言われています。

宮窪水産研究会

宮窪町には多くの若者が漁業に従事しています。その漁業後継者がこれからの漁業を良くするため「出来ることから始めよう！」を合い言葉に会を結成しました。最初は、海岸清掃からでしたが、現在では「宮窪の漁師市」の開催や後継者活動など、その活動範囲は徐々に広がっています。

「潮流体験」のはじまり

愛媛県がしまなみ海道をPRするため、「しまなみ活動」モデル事業を実施することとなり、役場よりこの事業で「潮流体験」をやってみませんかと話がありました。しまなみ海道開通イベントの自主企画イベントやしまなみ大学で、同様なことを行っており、多少の実績があ

ったので行うこととしました。

最初は、私たちが毎月第一日曜日に実施しています「宮窪の漁師市」に来たお客さんの滞在時間を長くするため試験的に行いました。第一回目は、宮窪漁港から多々羅大橋まで漁船でクルージングするコースで行いましたが、時間が一時間程かかるため、船酔いや料金等の問題からコースを再検討しました。そこで思いついたのが「能島」でした。

能島は、今から約四百年前、能島村上水軍の総大将「村上武吉」が出城として使っていた島です。出城と言っても陸の城にすれば本丸にあたります。能島は日本で唯一の「海城」として国指定の史跡となっております。また、能島周辺は、私たち漁師も恐れる激しい「潮流」があ



漁船で満喫「潮流体験」

歴史・文化を活かしたまちづくり

り、この潮流により能島が海域として、その島自体が要塞となっていたのです。「潮流体験」を行うことにより、能島周辺の激しい潮流を体験してもらおうと同時に、能島村上水軍の歴史等について知ってもらうことが出来ました。

20分の自然体験

いざ出航！能島までスピードを上げて漁船を走らせませす。能島に到着後、水軍ふるさと会のボランティアガイドが、能島や村上水軍の歴史等について説明します。途中、潮流が激しい所で「潮流体験」を行います。エンジンを止めると船が潮流に流され、潮の流れる音が聞こえてくるんです。この潮流や潮の音は、四百年前と少しも変わっていません。

お客さんの中には、「遊園地より面白かった！」と言う人もいました。徳島県の人々が「鳴門より良かった！」と言ってくれたのにはびっくりしました。

「鳴門」の渦潮

私たちが始めた、「潮流体験」が町を動かしました。来年のためには鳴門への視察研修が行われ、町長、助役さんを含め二十四名の参加がありました。さすがは日本三大潮流でした。渦潮が観光の目

玉であり、観光シーズンも過ぎていきましたが観光客で賑わっていました。しかし、鳴門の「渦潮」は、目で見て楽しむものでした。お客さんのアンケートによると、「潮流体験」が鳴門より良かったと書いていた人が数名いました。「潮流体験」には、耳から聞こえてくる「潮の音」、漁船ならではの目線による潮流の迫力感や「能島村上水軍」の歴史など、鳴門に負けない魅力があることを確認することが出来、大変自信となりました。

これからの課題

鳴門の研修に参加して、「潮流体験」の魅力をより一層認識することが出来ました。しかし宮窪町は観光地ではありません。



日本昔ばなし（鯨のお礼参り）で有名なお地蔵さんが見守る渦潮

せん。このため、「潮流体験」のお客さんの感想にもありましたが、もつとPRをして「潮流体験」を知ってもらう必要があります。また、観光地でない特色を活かすため、宮窪町だけでなく「しまなみ海道」沿線の人たちと連携して、マイカーや自転車でゆっくりとしまなみ海道を訪れる人たちに「潮流体験」の魅力をアピールしたいと思います。

最後に、「潮流体験」はボランティアガイドの人たちや役場の協力があつてそれなりに成功しました。これからは、この「潮流体験」を継続して行い、宮窪町の知名度を上げると同時に私たちが自信を持っている宮窪の魚のブランド化へとつなげて行きたいと考えています。



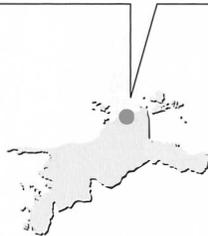
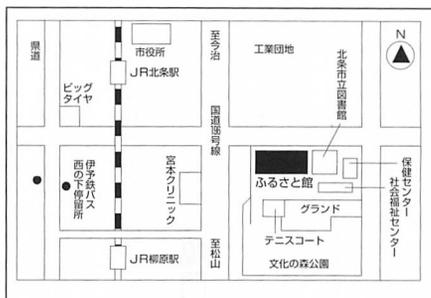
海の難所「荒神瀬戸」

歴史でまちおこし



北条市 風早歴史文化研究会

副会長 竹田 覚



北条市は高縄半島の西北部に位置し、県都松山市の北に隣接しています。三方山に囲まれ、西は瀬戸内海に開けた人口三万人足らずの田園都市であります。

河野氏関係交流会の開催

北条市では、平成三年「夏まつり」の行事を実施するに当たり、各種の文化団体が市民手づくりで祭りを盛り上げようという気運が起りました。その時、北条市の歴史を取り上げた行事として河野氏に視点をあて「河野氏関係交流会」が計画されました。

河野氏は、風早河野郷から起り、平安時代末期から戦国時代末にかけて伊予一円に勢力を張っていました。この河野氏約四百年の歴史をみますと、時代により栄枯盛衰を繰り返して来ましたが、その間において、河野氏縁故の人たちは日本各地に散在するようになりました。

これらの関係者が、河野氏の発祥地であるここ風早の地（北条市）に集まり、自分たちのルーツについて話し合うことは極めて意義深いことであると考えました。また、この交流会を通して市民が郷土の歴史についての認識を深めるとともに広く市外や県外の人々と交流し、相互理解と信頼関係の友好の輪が広がるもの



河野氏関係交流会会場入口

と思います。更に、この交流会を継続して開催することが北条市の活性化と発展につながるものと確信します。

この「河野氏関係交流会」も、今年で十一回目となりましたが、期日は毎年七月第四日曜日、場所は北条市立ふるさと館で開催しています。行事の内容は、先ず開会前に全国各地の河野氏の史跡を写真で紹介したり、河野氏の系図・略年表などの資料展示をして参加者の興味・関心を高めるなどの工夫をしています。また、交流会の内容は、河野氏に関する講演や時には基調提案の後、シンポジウム形式の討議、質疑応答、意見発表などを実施しております。

歴史・文化を活かしたまちづくり



交流会における意見発表

岩手県北上市との交流

また、各地の伝統芸能の披露も一つの楽しみとして期待されています。例えば、岩手県北上市稲瀬町の小学校六年生十三名が岡岡念仏剣舞（かどおかねんぶつけんばい）に出演のため北条市を訪問した際、宿泊を同じ年齢の子供が居る家に受け入れて、友好の機会を設けました。それが機縁となつて家族ぐるみでの交際へと発展しております。

岩手県北上市稲瀬町は、河野通信が承久の変で流され二年後に亡くなり葬られた聖塚（ひじりづか）のある土地であります。

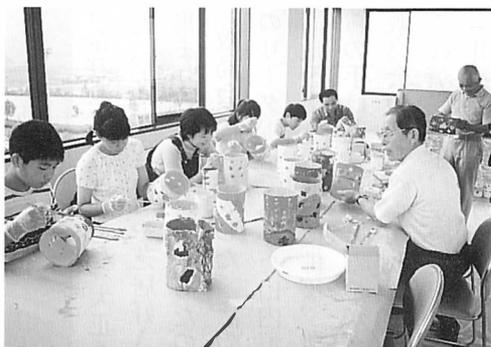
通信の孫にあたる一遍上人が聖塚を訪

ね供養している情景は聖絵（国宝）に描かれ、それを手掛かりに通信の墳墓（岩手県指定史跡）が発見された経過があります。念仏剣舞は、一遍の踊り念仏にも関係があるとされており、参会者に強烈な感動を与えてくれました。

更に、北上市稲瀬町の有志がトラック二台に約五百個の「夢灯（ゆめあかり）」を遠路運んできてローソクの灯を点灯してくれました。これに触発されて「夢灯」の製作を思いつき材料を工夫し形や炎の色の美観を考えセロファンを張り付けた七百個をボランティアにより完成しました。紙粘土で高さ二十二cm、直径十四cmの円筒形のものに色々な形の穴をあけて光が回りに発散するようにしたもので、中にローソクを灯すと灰かにもれる灯が幽玄の世界へと誘う感じでも素敵なものがあります。製作と点灯に協力するボランティアの輪が広がり、年々各地の縁日祭礼に点灯の希望が百個、二百個と寄せられ盛んに活用され各地の夜を彩っております。

河野通信の墳墓が縁となり民間団体での両市の交流が盛んになりつつあります。三年前、桜の名所である北上市から桜の苗木三本が寄贈され高縄山（源頼朝の挙兵に呼応して河野通清・通信が兵をあげ

た）の見える北条市立ふるさと館の前庭に植樹され毎年花をつけるように成長して来ております。この桜がすくすくと成長するように両市の友好が今後ますます発展することが期待されています。



夢灯の製作風景

新しい地域文化の創造

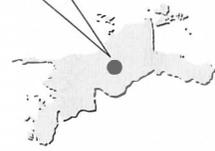
風早歴史文化研究会では、有志が毎年河野氏の史跡を訪問して、資料の収集と友好の関係づくりに努力し、写真などは河野氏関係交流会の際、展示公開して参加者の参考にしていきたいと考えております。また、河野氏ゆかりの地域の文化を参考にして北条市の新しい地域文化を創造することも大切なことだと考えています。

「川瀬歌舞伎盛衰記」



久万町 川瀬歌舞伎保存会

会長 段之上 喙



川瀬歌舞伎の始まり

川瀬歌舞伎は、久万町合併前の旧川瀬村の下直瀬地区において始められたので、この名がついている。

直瀬地域は、古くから浄瑠璃も盛んな所であった。44番と45番札所との中間に位置する集落で、四国霊場巡拝で巡ってきたお遍路さんの中に、浄瑠璃の上手な人がいると、幾日でも接待して留まらせ、その指導を受けたりしていたほか、冬の農閑期には、わざわざ師匠を雇い、指導を受けることもあった。

歌舞伎がいつごろから始まったのかについては、口碑や旧家に伝わる浄瑠璃の写本などによると、文化十二年（一八一五）には能次という人が浄瑠璃を語ったという記録があるなど二百年の昔から続いていることは間違いなく、安政年間（一八五四〜一八六〇）には家内安全と五穀豊穰を祈願する地鎮祭に歌舞伎を上演していたようである。

慶応年間から明治にかけては、阿波のデコ芝居がやって来た。また、美川村仕七川（旧仕七川村）へかかる旅回りの芝居も、ことあるごとによく立ち寄っていた。明治時代に入ると、特に浄瑠璃が盛んになり、冬になると皆が競って稽古に



「五三」での主役を演じる段之上会長

励み、春の地鎮祭に備えた。大正八年（一九一九）、地区の若者や芝居好きの器用人が集まり、浪曲芝居を始めたのがもとで、「敷島会」を結成した。その頃、敷島会のリーダー格であった山内恒太郎が、同地区出身の歌舞伎俳優、豊島屋豊次郎らの手ほどきを受けたのがきっかけで、敷島会のメンバーが歌舞伎をはじめた。これが、現在、愛媛県下唯一残る地芝居「川瀬歌舞伎」の始まりとされている。

第二の隆盛期

その後、地元青年男女によって受け継がれ、地域の芸能として成長し、太平洋

歴史・文化を活かしたまちづくり

戦争の初期には、予科練習生などの軍の慰問にも出演したが、戦局の緊迫によって中断され忘れ去られていった。

しかし、昭和二十年、終戦と同時に復活、以前の敷島会を解散して、山内恒太郎氏の肝煎りで、復員した仲間が集まって「更生座」を結成し再発足した。戦後の混乱も静まり、落ち着きを取り戻した同二十六年、下直瀬公民館が開設されたが、それと同時に更生座をそのまま公民館娯楽部に切り替えて、いよいよ第二の隆盛期を迎えることになる。当時は、男女合わせて二十数人という充実したメンバーであった。

昭和二十七年、松山市庁ホールで、同



川瀬歌舞伎後継者の公演「太十」

二十九年には道後公会堂で、それぞれ公演した。さらに、同三十二年には農研グループの県代表として、県歯科医師会館で大谷文楽とともに出演、川瀬歌舞伎の真価を発揮したのである。

川瀬歌舞伎保存会の結成

ところが、これほど盛んだった川瀬歌舞伎も、若い人たちが都会に出てしまうようになり村に残る青年男女も年毎に減少したため、その伝承を危ぶまれるようになった。

そこで、昭和三十六年に、この川瀬歌舞伎の伝統がすたれていくことを憂い、公民館を中心として「川瀬歌舞伎保存会」を結成し、後継者の育成に努めることとなった。三たび伝統の灯がともされたのである。

古典芸能の伝統を守り、育てる地域ぐるみの雰囲気と心意気は、内外に高く評価され、昭和四十二年十二月、久万町指定無形文化財、平成十二年四月、愛媛県無形文化財にまで指定されるに至った。

心配されていた後継者不足の問題も、平成十二年には七名の地元若者による後継者が立ち上がり、早くも三回の公演をこなしている。加えて、三味線と太夫不足についても、平成十二年度から開始

された「愛媛県文楽後継者養成講座」に三名がエントリーしており、役者と浄瑠璃語り・三味線まで全て自前でそろった一座づくりが可能となりつつあることも、心強いかぎりである。

活力あるまちづくりへ

現在も、地域住民及び会員相互の連携と親睦により後継者の育成に努めているところであるが、定期的な練習の集まりが幅広い年齢層のコミュニティの場であり、地元住民の親睦の場にもなっている。伝統を継承すべく地域の人達と一体となって協力していくことが、活力あるまちづくりにつながるものと考えている。



松山市での県費補助による浄瑠璃練習風景

宇宙の平和を 願う町でありたい



宇和町 中町を守る会

会員 小田 実全



宇和町の歴史(町並みの形成へ)

宇和町の歴史は、古墳前期から脈々と継続していることが、近年の発掘調査によって解明されました。奈良国立文化財研究所に所蔵されている「宇和評」の木簡により七世紀律令時代より地名として存在していることが認められます。九世紀中頃から、藤原純友を討伐した橘氏が数代に亘って宇和の地を治めていたことが、「宇和町誌」にも記録されています。

しかし、嘉禎二年(一一三六)西園寺公経の宇和莊懇望を幕府が受け入れて以来、西園寺の莊園となります。天正十五年(一五八七)最後の領主公廣が戸田勝隆に謀殺されるまで、三世紀半に亘ってその治世が続きます。その後二十年の間に戸田勝隆、藤堂高虎、富田信高と領主が変わり、藤堂高虎の宇和島入城以来宇和郡の中心は板島(宇和島)に移ります。

宇和島藩は、当初から財政が逼迫し困難を極めていたために、領内の開拓に精力を注ぎ、宇和の地は重要な穀倉地帯となっていくきます。同時に、卯之町には宇和盆地の米が集まり、造り酒屋数軒を中心として軒を並べる在郷町として栄え、藩内随一の宿場町を形成してゆきます。今日の「中町」の町並みは、明和七年(一



黒瀬城から卯之町を望む

七七〇) 創建の建物が最も古く、大半が十九世紀で、一部が二十世紀初頭の建物であります。

標準的な町屋の構造は、土間は表から裏に通り抜ける通り土間、居室は土間に沿って配置され、店・中の間・座敷の三室構成が一般的です。しかし、店と中の間が一室になったものも相当数あり、店や中の間の土間境には間仕切りの建具がないものも見られます。これは他の地方でもあまり知られておらず、卯之町の町屋の特徴といえます。この他、格子が「中町」を中心に比較的良く残っており、蔦(しとみ)、ひじ(持送り)、袖壁(そでかべ)、飾り瓦などの形態にも特徴があ

歴史・文化を活かしたまちづくり

ることを、「伝統的建造物群保存対策調査報告書」は指摘しています。

平成五年度から宇和町は伝統的な建造物十二軒の修復事業を実施され、ようやく住民にも意欲が湧いてまいりました。重要伝統的建造物群選定へ向けて官民一体となって学習と協議が進められていることを喜びに感じているところです。

歴史の流れを踏まえた

町並み保存に

ところで、町並み保存については、ややもすると現在の町並みのみに視点を注ぎ、歴史の流れを疎かにする感否めません。

私は、宇和の発祥は廃寺の遺跡が眠ると思われる石城（いわき 伊波岐）又は石野（いわの 伊波乃）にあるのではないかと類推しています。「倭名類聚抄」（わみようるいじゅうしょう）には、宇和郡の地名は、上記の他には三間（美萬）と立間（多知萬）しか掲載されていないからです。石城又は石野地区を中心にして古墳群が存在し、やがて松葉城、黒瀬城へと町の中心を移し、最終的には今日の町並みへと移り変わってきたことを充分に踏まえた町並み保存でありたいと考えています。地中に眠る遺構は、当面そのま

までも壊れる可能性が少ないので、現存し廃棄される可能性の高い町並みを優先的に修理保存を進め、その過程において住民の意識が高揚していくことを望んでいます。

歴史を標榜し、文化を標榜するならば、その歴史や文化の学びを通じて、保存への意欲を駆り立ててゆきたいものです。しかし、どの町並みにも歴史はあり、文化もあるのだから、陳腐な名前の標榜を右へ倣えをするよりも、宇和の史実や名称の中で特色の出せるものを標榜したいと希望しています。

今日の町並みの形成は、もちろん江戸時代中後期ではありますが、その原点は何と言っても西園寺実充の時代に黒瀬へ居城を移した時に始まると考えられます。実充は、嫡子公高を戦で失った後、甥の公廣を後継としました。その公廣は、召し上げた領地を半分安堵するという「朱印状」の受け渡しのため大洲へ出向くにあたり、時世を残しています。

「黒瀬山 峰の嵐に 散りにしと

他人には告げよ 宇和の里人」

その大意は、私は十二月十一日の今日、散りに行く紅葉の葉のように自然の摂理の名で散って行ったのだと他人には告げなさい。決して謀殺されたなどとは言

ではないぞ。その思いを受け止めてみますと、決して恨みを抱いてはならない。恨みを残せば再び争いにつながり、幾多の無辜（むご）の民の命を失うことになる。残された住民の行く末を思い、戒めを残して逝かれたのであります。やがて四百年に互って西園寺神社（現存しない）や町並みの山手にある光教寺境内の御廟に参詣し、願い事を掛ける人が絶えなかつたことと、幕下の諸將たちが今日まで毎年法要を営んできたことを思うとき、その人徳が偲ばれます。このような歴史の流れの中に「中町」の町並みも形成され、私塾申義堂も開明学校の建設もなり得たことを、住民の誇りとして守り伝え、宇宙の平和を願い、それを実現していくことのできる人材を輩出できるように町並み保存でありたいのだと願っています。



申義堂と光教寺

まちづくりにとっての地域学

愛媛大学教授 讃岐 幸治



❖はじめに—近年の地域学ブーム

近年、山形学、京都学、対馬学、遠野学など「地域学」と呼ばれる活動やグラウンドワークやエコミュージアムなど、それぞれの地域をベースとした学習活動や地域づくり活動が全国各地で盛んになってきた。全国的な地域学ブームの中で、本年十月には山形市で「全国地域学サミット」が開催された。

❖地域学とは

地域学というのは、地元のお宝発見的な「地元学」ではないし、中央に対する地方の学といった「地方（ちほう）学」でもないし、また柳田国男が都市対田舎という図式で田舎や僻地などに埋もれている民俗などをとらえた「地方（じかた）学」とも違う。

それは、慶応大学の金安岩男教授の言葉を借りれば、「地域を（情緒的ではなく、客観的に）再認識することによって、そこに含まれる特色や潜在する資源に気づき、学習者がそれらを再構成することを通して、学術的發展と地域の再創造・活性化」を図っていく活動である。別の言い方をすれば、地域の探求・地域の理解・地域の創造という三つの構造から成り立つ科学と運動を統合した活動だとい

つてもいいであろう。

❖地域学づくりの始まり

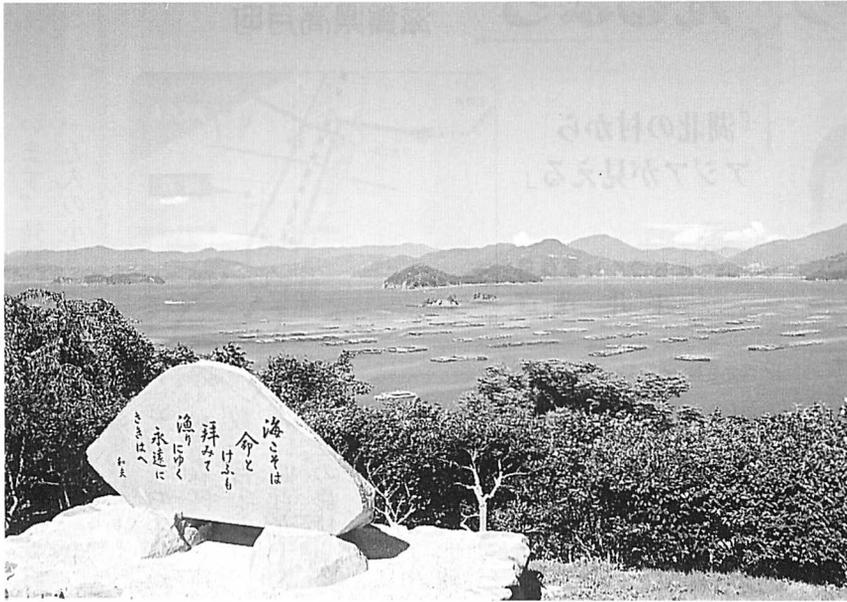
どの地域にしても、他にない郷土料理、地方の祭り、方言や自然などがあるが、それらが東京にあるものに劣るものではない。東京だけが文化的に優位であるものではない。

自分の住んでいる地域を見直し、誇りと自信の持てる個性的で魅力的な地域づくりをすることが最も大事なことだ。そのためには、自分の住んでいる地域の歴史、文化、産業、資源等の価値の再発見を通して、それらの特性に磨きをかけ、その地域「らしさ」づくりをすすめていく必要がある。地域特性を科学的に把握していくために、「地域学」づくりが始まったのである。

❖地域学づくりのプロセスと成果

地域学は、誰もが参加できる活動である。各人が興味・関心を持つことを探し、調べていく。地域のマンホールの数や川に住む生き物を調べてもいい。郷土料理や歴史的な人物や地名を詳しく調べてもいい。

どんな方法や手段を使ってもいい。タウンウォッチングの手法でも聞き取り調



査でもいい。文献研究でも質問紙法や踏査法でもいい。

地域の誰もが知恵袋であり物知り・物持ちであるとならぬおし、それらの知恵や知識、体験、事物などを調べることになる。それまでは知り合いではなかった人と知り合うことになる。

地域学づくりは、各人の課題発見・探求能力を伸ばしていくとともに、地域の中に生活の名人、達人、匠を発見し、知的ネットワークをつくりあげていく運動として、地域づくりそのものだといってもいいだろう。

❖なぜ、いま地域学なのか

社会が急激に変化する中で、自分らしい生き方をしていくためには、確かな自分を確立していなければならない。「自分は今まで自分である。」というアイデンティティを確立していくためには、何よりも意図的に自分を支えている生活の土台である地域を見つめ、それらに支えられ生きていく自分、自分が生きていくことの意味をしっかりと確認していくことが必要不可欠である。地域づくりの理論的根拠のためだけでなく、アイデンティティの確立の上からも、今地域学づくりが注目されているのである。

❖愛媛学―地域学の先駆けとして―

地域学の先駆けとして、平成四年十月十五日、愛媛県生涯学習センターを会場にして「愛媛学シンポジウム」が開催され、愛媛学の構築に向けて多様な研究活動が行われていた。しかし全国各地で地域学づくりが盛んになると裏腹に愛媛学への関心がここ数年薄らいできているというのが現状だ。市町村合併がすま、地域間競争が激しくなる今日、それぞれの地域の将来像を探るために、もう一度地域学への取り組みが必要となってきた。



愛媛学シンポジウム（平成4年10月）

キラリ 光るまち

滋賀県高月町



「湖北の村から
アジアが見える」

あめのもり
雨森 まちづくり委員長
平井 茂彦



*琵琶湖のほとりの小さな集落

滋賀県は中央に琵琶湖があり、周囲に平野が広がり、外回りを山が取り囲んでいます。琵琶湖の北にある高月町は人口一万人の小さな町です。その中に三十二の集落があり、

そのうちのひとつが雨森区で、戸数が百十五戸、人口四百九十人ほどの農村集落です。

雨森のあたりの地域は、北陸型の気候で雪がよく降ります。戦国時代には幾度となく戦いの舞台となりました。そんな琵琶湖の北の村から、江戸時代朝鮮との外交に活躍した雨森芳洲（あめのもり ほうしゅう 一六六八〜一七五五

年）という優れた外交家が生まれました。小さな集落では、偉大な先人の善隣友好の心を受け継ぎ、美しい村づくりや、韓国との交流などのまちづくりが続いてきました。

*東アジア交流ハウスの建設

滋賀県では、二十五年ほど前から「草の根まちづくり」として、自治会単位のまちづくりが進められてきました。住民の創意と工夫による自主的な活動が活発化しました。その中の一つが雨森の活動でした。

活動は、スポーツから始まり、若者のグループ「雨森野球部」が誕生して静かだった村に活気が戻ってきました。途絶えていた村の新聞「区報あめのもり」が復刊されました。

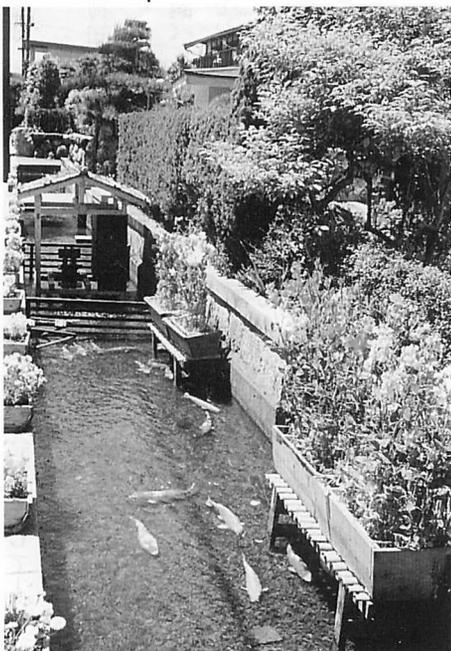
そして、埋もれてきた雨森芳洲を賛える活動も始まりました。その頃まで芳洲のことは地元でしかほとんど知られていませんでした。芳洲の遺した資料を集めた顕彰記念館の建設を町や県にお願いして、一九八四年に東アジア交流ハウス雨森芳洲庵の建設が実現しました。江戸時代の日朝の

長い友好の歴史や雨森芳洲の「あざむかず争わず」という誠心外交の教えに学び、アジアに向けた窓が開かれたのでした。

*鯉と水車と花飾りのまち

木造書院風の美しい建物となった雨森芳洲庵に調和する美しいまちづくりが始まりました。

雨森集落には、大きな木がそびえ、緑の生垣が続き、川が縦横に巡らされています。下流の農業用水となる川は、生活用水として集落を巡り、冬は雪を消すためにも使われる川です。この川を生かして、楽しみながら美しい川づくり活動が長続きするため鯉を放しています。鯉が泳ぐと川への関心が高まり、手づくり水



鯉と水車と花の町並

車がいくつも回り、川のそばには次々と花が並べられました。

美しい村づくりは、「ふるさと雨森の風景を守り育てる協定」を締結したり、集落内のグループごとに「まちかざりコンテスト」を開いたりしながら二十年間続いてきました。

この間、「花のまちづくりコンクール」や「手づくり郷土賞」等数々の全国表彰を受賞し、多い年には年間三万人の視察がありました。

*広報紙九百号と

青少年まちづくり

このような活動を続けるためには、まちづくりの情報をみんなに知らせ、まちづくりムードを高めるため広報活動も欠かせないものです。

雨森には、一九六二年に創刊された広報紙「区報あめのもり」があります。このごろでは週刊となり、発行回数は九百号を超えました。この広報紙の果たしてきた役割が大きかったと思われま

す。また、これからのまちづくりは、そのまちに一番長く住む若者の夢や思いを實現して、青少年たちにまちづくりの喜びを体験してもらうことが大切と思われま



サムルノリを踊る地域の子供たち



雨森芳洲ゆかりの朝鮮通信使の再現行列

ちづくりユースプラン」というものがあります。この中に盛り込まれた青少年たちの提言を實現してきました。その一つにバスケットコート完成もありました。不登校の子も地域の中で友達とバスケットを楽しみ、居場所が作れたのでした。

*世界的まちづくり

芳洲庵ができてからは、韓国の青少年が雨森を訪ねて来てくれるようになり、これまで千五百人を超える人たちをホームステイで迎えてきました。全国でも珍しい自治会の交流が行われてきました。新しい文化の創造ということから、女の

子たちが韓国の民族芸能「サムルノリ」を習って、国際交流の舞台で踊ったり、昨年は韓国へ出かけて演奏したりしながら、草の根の交流を続けてきました。今年の夏は、全国的に歴史教科書問題で韓の交流事業が中止や延期となりましたが、その中でも「こんなときこそ交流を続けなければ」と中学生たちが来てくれました。

グローバル化が進む中で、戦国時代などの日本的なまちづくりから、世界的なまちづくりを、小さな農村集落が「湖北の村からアジアが見える」をキャッチフレーズにしてまちづくりの発展をめざしています。

さて、引き算型まちづくりの第二回は、少し具体的な事例の紹介から入ります。

職場の中では、「非難」「批判」「指摘」などおおよそタブーとされる言葉が時に交わされる。いずれもこの言葉を受ける側からは嫌がられ、仲良しクラブ的な職場環境に風波が立つ。挙げ句の果てには「あいつは批判ばかり」と孤立化が進む。それぞれに立場や価値観が違うのであるから、こんなことが日常に起きていても不思議ではない。まちづくりとは価値観の問い直しであることを考えると情けない現象である。

旺文社の国語辞典を引いてみると次のような意味が示されている。「非難」とは、欠点や過失を責め咎めること。「批判」とは、事物の善し悪しを批評し、その価値や正当性等を判定すること。「指摘」とは、取り上げて示すこととある。にもかかわらず、これらの言葉を同じ配下のものからいわれると非難になり、上司からいわれると指摘になる。この言葉は、時には研究を積んでいない人たちが学んだ成果に対して使われる場合も少なくはないので一概には言えない。多数決民主主義の落とし穴もこの辺にあるのだが、このことは常識や非常識といった価値観になって現れてくる。

不思議な社会もまた組織のしがらみな

のか。課や係のチームワークとは、相互信頼のもとで批判や指摘が飛び交うところにこそ発揮されるものでなければならぬが、皆さんの職場や地域ではいかがでしょうか。

引き算型まちづくりとは、私なりにには気付いたものが発する批判であり、指摘をベースにして、地域を問い直そうとするものである。既存の価値にとらわれ、慣習を拠り所としていたのでは地域づくりは進まない。ことを急ぎすぎるのかもしれないが、こんな思いで考え発言してきた。残念ながらこのこと自体が受け入れられる職場環境にないことから、孤立し、浮き上がり、結果は運動の空回りになり、障壁になってしまふことも少なくない。妥協すればどうってことはないが、妥協するということは運動を進める上では「下方に修正する」ことであり、前向きにはならない。

町に協力???

公民館をはじめ、行政の各所管が開催する公的会議の中で、あるいは職員と住民の間で交わされる会話の中で良く聞かれる言葉に、「町に協力している」ということが度々登場する。時には行政職員の方から「町のことですから協力してください」との声も聞く。この時の「町」

とは一体なになのか。行政が考える町と住民が考えるそれとの間には、余りにも大きい隔たりを感じてならない。住民の声を聞いていると、そこには「町」という地方自治体ではなく、「○○町(村)役場」を指して語られている。つまりは行政組織が企画する様々な活動に対しての従順な参加と協力に対するの意図に聞こえてならない。言葉を替えれば、こうしたことを企画する公務員であるあなたたちに対して「協力しているのですよ。」と喋っているようでもある。つまりは役所で行っていることの多くの部分で、住民のためとする企画や事業がどれだけ存在するのか気になるところでもある。

行政が主催者になればなるほど、この協力という姿が鮮明になる。住民には評価されたいものであるにもかかわらず、町のため、地域のためにと付き合っていただいては住民との間に、説明すべき責任が果たされていない結果かも知れない。

戦後五〇余年の間、復興から経済成長へと、インフラをはじめ住民にとっては生活、教育、産業、福祉、医療など、あらゆるジャンルで行政から給付されるサービスによって今日が築かれてきたことを考えると、その恩恵?に対する謝意を含めて「協力」という考え方が定着し

たのかも知れない。

行政が住民と乖離した姿に対する懸念の声が聞かれて久しい。乖離には行政組織そのものの拡大や事務の固定化、定期的な人事異動など要因は枚挙にいとまない。行政事務を経験した私にとっても、個々の住民の声、さらには住民組織の声と、議員もしくは議会の声の重みについては明らかにその差異が窺える。議会制民主主義を否定するものではないが、近年の地方自治体が抱える原発、ダム、産廃等々巨大な公共事業に関して、議会を超えて住民の直接投票によってその賛否を問う仕組みが日常化しつつある。事の真偽は別として、ここまで来ると、最早「町への協力」といった物差しでは測れない危機感なのか、行政計画に対する不信感なのか、黙っては居られないといった別個のパワーが生み出されていく。このエネルギーを良しとするか悪しき状況とみるかは様々である。

一方で、一九七〇年代から「まちづくりと称する新しい動き」がはじまった。むしろ新しい動きを誘引する先進的な地域づくりの事例があつたことではあるが、今どこの自治体でもこのことが重視され、担当部課と専任の職員を配置してまちづくりが進められている。住民の

側には官製の組織が作られる。そして補助金が給付され、先進地視察が恒例化し、時には活動事例がにぎにぎしく広報やテレビで紹介される。ここでも地域住民のスタンスとしては、「まちづくりに協力する」となることが多い。もしもまちづくりが行政へのお手伝いとすればなにかいわんやである。

視察研修に要する時間は九〇分から一二〇分。説明もそこそこに現地を見て、道後温泉へ急ぐ団体にどれほど付き合ってきたことか。長年こうした視察の人たちを受け入れてきて、つくづく考えさせられる。こうした視察の企画は、多くが担当課の職員によって取り組まれることは、自分の町がそうであるように、よその町もまた同じことであろう。予算の消化、協力してくれる住民に対する研修という名の慰安？旅行。全てが悪いものばかりではない。一方でまじめな地域、まじめな人は、私費もあり官費もあろうが事前に訪れ、担当者自らが学び、しっかりとレクチャーを受ける。なにを学び、なにを住民に学ばせればよいかをカリキュラムとして纏め、先方に打診し、学ぶ効果を追求する姿勢に出会うこともある。もう一つの物差しは「会費」にみられる。行政活動を円滑に進めるために、あるいは住民参加の大儀のために組織され

る住民組織は、ジャンル毎にみても相当の数になる。この組織は、官製といわれるだけあって、会則と補助金がセットで用意され、「がんばってください」と組織活動がスタートする。先進地視察などはその最初の事業になる。どこかをみないことには何もしようがないとばかり。主体性がないためか、会費が徴収されないか、あつたとしても言い訳程度のものである場合が多い。

いつの間にか、「補助金がなければ活動ができない」との声が強くなる。まちづくりだって町への協力だから要求としても当然のこととはいえ、どこかおかしい。自分のこと、自らの地域のことに対して、「自らが協力する」という言葉が存在すること自体が間違っているといえ、もしかすれば公的な肩書きを持つている人たちは、即座に職を退くのであるうか。

今、まちづくりの中にこそ「協力」が災いし、コミュニティが混乱している。役員の手がない。過分な負担はお断りにとべもない。では何から手をつければよいのかはマニュアルはない。このことに気付いた人が、次の人に気付かせる。それしか方法は無い。

内子町 岡田 文淑

八幡浜市と大洲市、長浜町の分水嶺に鎮座する金山出石寺を戴く出石山の麓に生まれた私は、林業主体の暮らしの中で、子供の頃から野鳥や昆虫や植物など自然界の素晴らしい仲間たちに親しんできました。彼らは正に私のベスト・フレンドであり、体を張った地球環境保全活動のパイオニアとして『お師匠さん』と呼び、敬愛しています。

そんな私のメインフィールド、佐田岬半島は、古来より「岬十三里」と称され、

やっぱり付着した植物の種子やメダカの卵等々、実に多くの生き物が行き交っています。

さて、魅力あふれる自然の宝庫・佐田岬半島も、私たち「万物の霊長」とやらの限らない欲望と奢りによって、環境モニタリング抜き乱開発、昆虫コレクターや御用学者による残酷採集、山野草マニアの巧妙な根こそぎ盗掘など、次々と理不尽なダメージを被り、傷付き青息吐息の今日この頃です。

NATURE IS PERFECT AS IT IS

自然は在るがままでパーフェクト！

八幡浜さんきら自然塾／佐田岬半島生物研究舎

代表 水本 孝志



日本一の細長さ（五十五km）を誇る半島であるとともに、豊予海峡を挟んで、四国内陸部と九州を最短距離で結ぶ国際的な《マイグレーション・コリドー》渡りの回廊》として売り出し中です。

ハチクマやハイタカ・ノスリ・コムクドリ・サンコウチョウ等の鳥類は勿論のこと、オヒキコウモリ等の哺乳類、アサギマダラやウラナミシジミ等の蝶類、ウスバキトンボやアジアイトトンボ等の蜻蛉類、ブルーニング（流し糸）による蜘蛛類、はたまた動物たちの羽や脚に、ち

このような自然生態系の見事さと危うい現状を伝えるべく、一九八八年に設立した『佐田岬半島生物研究舎』を發展させ、一九九八年に『さんきら自然塾』を結成。以来、毎月第四日曜日に八幡浜市諏訪崎の自然休養林を舞台に『すわざき自然感察会』を開催・・・超楽しいネイチャーゲームや伝承野遊びに、人工物を極力使用しないで落葉や枯れ枝を用いたクラフトも採り入れ、『自然に優しい人づくり』を展開中です。参加無料の気軽な観察会です。現地駐車場に朝九時集合。

独りで、ファミリーでは是非どうぞ。愉快な仲間が待っていますよ！

又、毎月第二水曜日開講の『さんきらエコロ夜間塾』では、各フィールドで活躍する骨太のナチュラリストや本物のエコロジストを結集して研鑽を重ね、エコアクションへのエネルギー源としています。各界の特別ゲストコーナーや動植物種名同定タイム、「今が旬」の 슬라이ド上映会など盛り沢山ですので、お誘い合わせで多数参加下さい。

尚、二〇〇一年からは、撮りためた動植物と環境問題現場の写真を駆使した『出張スライド・ネイチャリング講座』と、バードウォッチングや昆虫・山野草ガイドなど、専門指導者派遣による『出張自然観察会』を、各学校や役場・公民館・団体研修会等で開催し好評を得ています。自然界の《声無き声》を心を込めてお伝えしますので大いにお声がけ下さい。

「お問合せは0894・24・4961」
とこで皆さん、『さんきら』って何存知ですか？ 全体が「葉用蔓植物」として有名なユリ科の猿捕茨（サルトリイバラ）の方言名で、山に棄られた不治の病人も、この根っこを齧って元気になります。《山から帰って来た》というエピソードから、『山帰来』さんきら』なのです。

※Eメールで情報交換よろこび

sunkira@sis.ocn.ne.jp

「千人塚（潮風ふれあい公園の溜池）で交通事故に遭って暴れよるから、早く見に来て」。電話を取るなり、怒鳴るような大声が耳をつんざく。電話を置きこれは大変と胸の高鳴りを抑えながら車を走らせ、言われた現場に行ってみると、何とこれが人の交通事故ではなく、災難に遭ったのは池で飼っているカモのことでした。

双海町役場に就職して、地域振興課に

私のプロジェクトX

双海町役場 地域振興課

関木 浩司



配属され、シーサイド公園と並んで双海町の顔となっている「ふたみ潮騒ふれあい公園」の管理を担当して三年半が過ぎました。

大学時代、私の役場職員のイメージは、地味な濃紺の制服、頭は七三分け、黒い腕抜きをしている姿でした。しかし、こ

メージを払拭するに余りある職場でした。雨の日には雨合羽と長靴の出で立ちで、広い公園内の側溝の掃除、夏は刈っても刈ってもスクスクと成長し続ける雑草との闘い、秋は食欲旺盛な松くい虫の被害木伐採と、季節の移ろいなど感じる間もないほどの作業量が待ち受けています。その上、宿泊施設やスポ・レク施設の営業実績にも気を配りながらの毎日です。

仕事中にかかってくる住民からの電話

は相変わらず多いですが、そうした電話の殆どは、毎日公園内の道路を通って農作業に行く人や散歩をする人たちであり、園内の変化に真っ先に気づき連絡してくれるのは公園を愛すればこそで、公園管理にはこうした地元住民とのよりよい関係が不可欠なのです。

ある日、家に帰ってふと机の上を見ると、「プロジェクトX」という本が置いてありました。多分父親が置き忘れたの

でしょうが、何気なく開いたその本の中には、自動車会社マツダのロータリーエンジン開発に携わったリーダーの話や、VHS（ビデオテープ）を開発したリーダーの話、大島町役場の助役が島民全員を安全に避難させた話などが興味深く書かれていました。

何かを作り出したり実行しようとする時には、周辺の住民の協力が不可欠であり、その協力を得るためには、日頃から何が必要であるかを考えて行動しなければなりません。大島町役場の助役が災害対策本部の指揮官として全島民を避難させた話の中の、「役場に勤務し、いろいろな部署で何十年間コツコツと誠実に職務を遂行した結果が、全島民避難という一瞬に発揮された」という下りは、感動する言葉として大切にしていきたいと思っています。

就職して三年半の未熟で半熟卵の私には、大島町助役のようなリーダーシップは取ることができませんが、公園管理という立場で、周辺住民の協力が得られるよう毎日誠実に仕事をこなし、住民とのより良いコミュニケーションを大切にしたいと思っています。

“MY TOWN,,うおっちゃんく”

歩キ目デス & 足ラテス

第18弾

近代化遺産シリーズ

「学校建築①」



岡崎 直司



近代化遺産の中で、今回は学校建築を追いかけてみよう。

江戸期に、伊予八幡と呼ばれた愛媛には、当然多くの藩校と呼ばれた学舎があった。しかし、それは武家の子弟に限られ、大洲八幡神社の私塾であった古学堂などの例外はあるものの、庶民の多くは寺子屋に頼る他は無かった。つまり、教育の平等は、士農工商の枠組みが崩壊する明治という新しい時代の幕開けを待って初めて訪れた。

さて、現存する貴重な校舎が宇和町にある。一八六九（明治二）年建築の申義堂（写真①）。義を申（かさ）ねるというネーミング自体、新時代の空気を伝えている。どうということのない平屋の木造家屋。されど、当時の人々の勉学への意欲は相当なもの。儒学者左氏朱山の感化があったとは言え、何の公的機関にも頼らず、たった一ヶ月余りで自分達の学舎を建ててしまった。老朽化した危険校舎を補助事業（税金）で改築する現代の状況とは、捉え方が根底から違う。

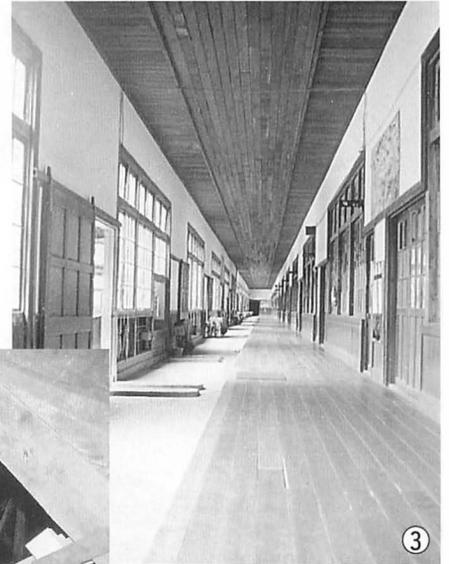
一八七二（同五）年、学制改革の時を迎え、いよいよ近代教育がスタートする。そして、この申義堂がそのまま開明学校として再出発する。又々時代の意気込みが伝わるネーミング。余程名付けに熟慮



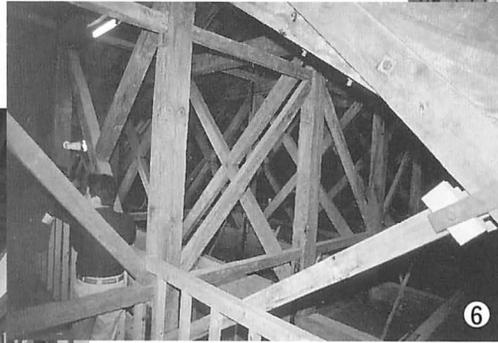
する有為の士が居たものか。

やがて十年の時が流れ、校舎も手狭となり、新築の気運が高まる。そうして誕生したのが現在国重要文化財となっている開明学校（写真②）、一八八二（同十五）年築。それまでの純日本式建築と違い、新校舎の様相は一変した。見たこともないアーチ窓が一、二階ともズバリと並び、そこにはガラス窓が新時代の光を反射させていた。それは、教育の近代化が、もつと分かり易く見た目から入ってきた瞬間でもあった。

さて、時代は下がり、一九三四（昭和九）年、一万一千坪の校地面積を誇る宇和町小学校が完成する。この内、現在隣接地の山腹に移築保存されている建物が三棟ある。日本一とも言われる百メートルを越える長い廊下を持つ旧第一校舎（現在米博物館 写真③）、そして講堂（現武道場 写真④）と旧第二校舎（写真⑤）。後者の二棟は元々一九二一（同十）年に町内坪ヶ谷に建っていた建物で、再々移築ということになる。



間柱の無い旧第一校舎 ③



講堂の屋根裏 ⑥



間柱のある旧第二校舎 ⑤

特に講堂の屋根裏は必見（写真⑥）。大木造トラス構造の空間迫力が見られるよう、移築後に仕掛けが設備され、見学申し込みに応じてくれる。このトラス構造という技術は、日本には無かったもので、西洋からこれが入って来たお陰で、明治以降木造建築の形態が革命的に変わった。まず、講堂や工場、倉庫など、広い空間を必要とする場面で、邪魔となる柱を置かなくて済む。この工法を用いたものとして、



トラスにより柱の無い空間確保

道後温泉本館（明治二十七年築）が知られているが、建築の変遷を見る限り、この技術との出会いは画期的であった。いずれにしても、明治・大正・昭和・平成、四代にわたる学校建築を有する宇和町は、全国でも類まれな町だと言える。次号では、県内各地の近代の学校建築を訪ねてみたい。乞うご期待。

風おこしのちかい

小さな村のまちづくり

えひめ地域づくり研究会議運営委員

内海村 浪口 靖宏



今、「真珠貝のふる里」内海村が危機的状況にあります。ここ数年のアコヤ貝大量へい死によって生産高が急激に減少し、真珠産業そのものの存立が危ぶまれています。こうした現状の中で、以前から地道にボランティア活動を行いながら、地域づくりに貢献しているグループがいくつかあります。

旧へんろ道「柏坂」を、歩きへんろの

人達が歩きやすいようにと急な坂を石畳にして道の流出を防ぎ、草刈りも年数回実施してクマザサや小枝をきれいに切り落とすなどの奉仕作業を行っている、「柏（かしわ）を育てる会」の毎年グループがあります。この活動は、十七年前より続けられていて、現在「トレッキング・ザ・空海」のイベントの仕掛人となっているグループです。昨年は、「四国へん



トレッキング・ザ・空海

ろ道文化」世界遺産化の会の方々も参加していただき、にぎやかなイベントになりましたが、昔から引き継がれてきたお接待の心を忘れない柏地域の人々のおかげで、このイベントが成り立っていることを強く感じた次第です。これからも時代を超えて四国へんろ道を旅する人々を支えていける地域として大切に育てていき

たいものです。

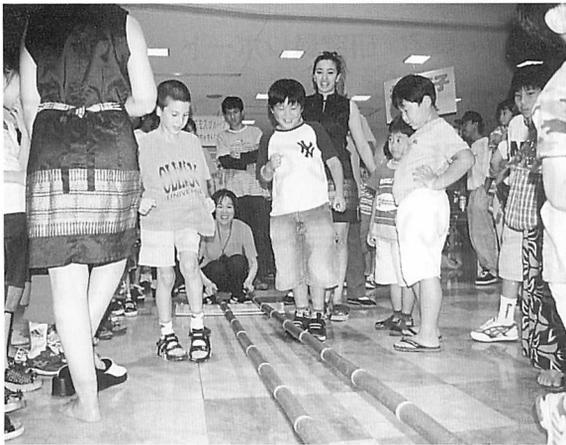
また、四年前から真珠母貝の産地をPRしようと村内有志で組織された「ほつと計画委員会」と村が主催する「パールジュエリー・デザインコンテスト」は、当初、規模も小さく地元志向のこじんまりとしたものでしたが、今では、全国各地そして海外からも個性的なデザイン約四百点もの多数の応募が来るようになりました。入賞作品も大変レベルが高くなり、将来は、「ジュエリーデザイナー」の登竜門になればいいなあと夢見ています。そして、私達も全国レベルのコンテストを創り上げることは、即、村のまち



「パールジュエリー・デザインコンテスト」上位入賞作品
(中央最優秀賞、左右優秀賞)

づくりを全国に発信することにつながるため、これまで以上に人的なネットワークづくりが求められてくるものと思います。

また、村内最大のイベント「うちうみ夏祭り」やDE・あ・い・21を中心とした「七夕祭り」、「パールイルミネーションDE・あ・い」などの主たる企画運営を行うわずか十数名足らずの商工会青年部員達、仕事の合い間に村内唯一の交流施設DE・あ・い・21に寄ってはこの指とまれ方式で青年団や漁業青年同志会若者夢倶楽部のメンバーを引き入れ、はじめは見る立場でいた若者達が、運営す



DE・あ・い・七夕祭り

る立場の大変さ、そして楽しさを徐々に理解してきて、今では、自主的にいろいろな行事に参画してくれています。「海との共生」を目指すブルーシー作戦もその一つです。少子高齢化の中、村の将来を担う若者が、地域の活性化と環境保全を図るため、ボランティア活動を行い、その姿を子ども達が見て育つことにより、「海と共生」のできる村づくりが将来にわたってできていくものと考えています。ところで、今やほとんどの市町村がホームページを開設していますが、業者委託の自治体が多い中、先のメンバーが中心となり、ボランティアによる手作りのホームページが運営されています。「村外に誇れる内容を目指して」と昨年五月にリニューアルをし、業者委託にはない斬新な発想で、また、常に見る側の視点に立った内容が盛り込まれています。特に、県外に住む村内出身者の要望に応じて、四季折々の写真を毎月掲載したり、村内の特産品の試食レポートや懐かしい今昔写真展等新たな企画を生み出しています。既に百数十ページとなり、アクセス件数も六万件近くになっています。今日もまた、仕事を終えたメンバーが三々五々集まってきてアイデアを出し合い、少しでも内海村の魅力を村内外に発信す



パールイルミネーション in DE・あ・い

るために、ホームページの作成を行っています。

今、本村は、経済的に大変苦難を強いられています。しかし、彼らのような青年がボランティアで参加し、楽しみながらまちづくりに携わる姿勢がある限り、小さな村のまちづくりは必ず花開く時期（とき）が来るものと信じて、彼らとともに「歩（あゆみ）」を進めていくつもりです。

研究員レポート

寒い山形で 熱い人達に出会う

研究員 三好 誠子

十二月早々、東北山形へ視察研修へと向かった。

四日間をかけて県内を巡る、それも内子町の岡田さんとともに、行く先々で丁寧な案内付きという、なんとも贅沢な研修である。

今回訪れた地で出会った方々は、決して内陸部の特徴とも言われている内向的な人達ではなかった。それどころか、嬉々として自らの生活ぶりを話され、活動を自慢げに披露してくださる、バイタリテイあふれる方ばかり。雪深い地で忍耐強く春を待つ……一昔前のおしんのイメージはなかった。

その筆頭となるのが高橋信博さん。少々伸びている髪の毛を後ろで一つに縛

り、駅で出迎えてくださった。れっきとした県の職員である。

午前中ワークショップをするので、遅れるかもしれないと言われていたが、過去十八年で四百回のワークショップをこなされているそう。それも県下各地へ出向いてである。行く先々で出会う人たちは皆名前前で呼び合える、県下の道はどこも地図なしでOK、下手をするとどこに誰の家があるかまで把握している、というすごい方である。経歴も、東京都のバスの時刻表作成業務に何年か携っていた、初任者研修にホームレスの実態を研究した、彫り物師で獅子頭を彫っている、釣りやロードレースも趣味等々、時間がいくらあっても足りないのでは、と心配するほどの活躍ぶりである。なにより、明るく行動的、頭はめまぐるしく回転している。今回の研修では、高橋さんに出会えたのが一番の収穫であったと思えるほどである。

しかし、それではせっかくな骨を折ってくださいと高橋さんにも申し訳ないので、いざ第一の視察地である山辺町の作谷沢(さくやざわ)そばまつり会場へ。

まんだらの里(作谷沢)のそばまつり

山形市内から三十分ほどとわりと近いが、途中山道で道幅も狭い。峠を過ぎると急に視界が開け、作谷沢の集落が見えてくる。小中学校の隣りにそばまつり会場があり、地区の皆さんがそば打ちに、

特産品販売に、接待にと大忙しで働いておられた。その会場で、中心となって活動しておられる吉田さんに話を伺う。交通の便が悪い土地でありながら、地区外からの転入者もあり、地区外とも活発に交流している。昨年の農村アメニティコンクールでも特別優秀賞をとった。地区内にある湧水池の整備、広場の造成、県内最初となる体験型農家民宿など、どれをとっても住民達が自ら作り上げたものばかり。自分たちで住み良い地区にしていこう、という気概が感じられた。それも楽しみながら。「豊かさのレベルを自分達できちんと持つていなくてはいけない。」「不便であるというところが程良いハードルになっている。自分達の地区に来て住みたいという者に対して、おのずと取捨選択が出来る。」という、吉田さんの言葉には自信がこもっていた。

エコミュージアムの町

次に県を南下し、朝日町に向かう。ここは「町全体が博物館、町民全てが学芸員」というまちづくりを掲げ、昨年六月に活動拠点となる「創遊館」が出来た町。その会館内で朝日町エコミュージアム協会事務局長の松田さんにお会いした。現在事務局を「創遊館」内において活動を進めているわけだが、町の総合開発基本構想にも謳われ、行政の後押しなど有利な条件があり、それらをうまく利用する形でNPO法人化した「朝日町エコミ



山形の素晴らしさの一端を見せていただいた高橋さん(右)と伊佐沢地区公民館富永さん(左)のツーショット

エコミュージアム事務局長松田さん

作谷沢の元気人吉田さん

ユーージアム協会」が立ち上がった。住民と行政のいい関係が見られたが、それを支えているのが松田さんの存在のような気がした。笑顔を絶やさず、でも言うべきことはきちんと言う、そんな松田さんの協会です役割は大きいと感じた。話の中で、『エコミュージアムとは、最終的に人ではないか。思想を押し付けるのではなく、人と人のつながりを再確認することだ』と言われていたが、いみじくも、作谷沢でも同じ言葉を聞いた。吉田さん曰く、「地域が元気になるのもそうでないのも、要するに人なんです。元気な人がいるんです(山形なまりではあったが、こんなニュアンスだったかな?)」。

その夜は白鷹町で宿泊し、翌日長井市へと向かった。

またまた元気な人と会う

長井市では、とても元気な女性に出会った。富永千亜紀さん。伊佐沢地区公民館の主事をしているとか。公民館に勤務はしているが、公務員ではない。ほかの町でも聞いたが、公民館職員はその地区で雇用するというのだ。今年四月から勤め始めたという富永さんは、とにかく明るい元気な女性だった。そして、伊佐沢の地をとっても愛している様子が伺えた。こんな若い可愛い女性に熱くふるさとを語られたら、地域の人だつて頑張つてやるっきゃないな、そんなことを思つたり

した。

そのあと連れて行つていただいたのは伊佐沢の地で陶芸をやつている川原さんの工房。なんと川原さんは砥部町で焼き物の修行を積まれたとか。こんなところで愛媛の人に会うなんて、と喜んでいただいた。しかし、お国柄なのか、陶器ほどに興味を持つてもらえない、大変です、と言つておられた。伸びやかな絵を描いた、砥部焼よりも厚味の少ない、すっきりとしたいい磁器のように見えたけれど、どこでも、いい地域、元気な町なら必ず元気な人がいる。地域づくりはやつぱり人と人のつながりなんだ、そんなことを改めて感じた旅だった。

それと、おそばは、食べたとき「何これ!」と思うほど歯ごたえがあり、食べにくかったけれど(高橋さんのご好意により、三日間昼はいつもおそば)、今となってはみるみるうちにいしかつたと思えるから不思議。もう一度食べに行きたいと思つている。

人の熱い思いと、雪国の寒さに触れた今回の視察だった。



フキの葉に盛られたおそばごちそうさまでした

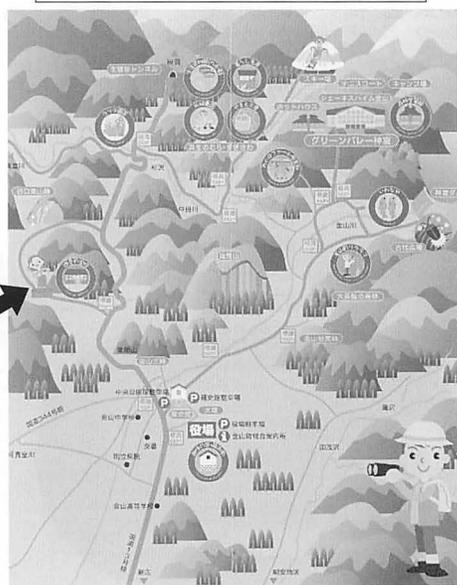
※エコミュージアム……エコロジー(生態学)と「ミュージアム」(博物館)を結び付けたもの。一九七〇年代初めにフランスの博物館学者アンリ・リビエールによって考えられたまったく新しい考え方。住民と行政が一体となつて発想し、形成し、運営するという点が大きな特徴。

研究者レポート

「谷口がっこそば」で 感じたこと

研究者 森田 浩二

グリーンツーリズムが謳われる。新しい農村の生き方と言う人がいる。農村を救う手段だと言う人もいる。しかし金儲けの手っ取り早い方法と勘違いしてはいけない。素朴さと雑さを勘違いしてはいけない。媚びることとおもてなしを混同してはいけない。由布院・亀の井別荘の主人、中谷健太郎氏は「旅館という商売柄、自分の世界の端っこに立って、お客様という別世界からの異人を迎える。異人から何物かを頂き、替わりに何物かを差し出すという暮らしを毎日続けてへたばらないためには『のめり込む好奇心』と『戦う血』が必要だ。まちがっても『融



谷口地区

金山町でのいろいろな体験メニュー

和歓迎」などと口走ってにこにこコピを売ってはならない。そんなことをすれば、自分の領域が境界の辺りから溶けだして、ついには消滅してしまう。」といわれる。昨日まで農作業をしていた農家が明日からたちまち旅館やレストランなどできようはずもない。そこを勘違いすることなく、「地域で自信と誇りを持つて生きること」「地域が元気でいること」を目指したい。そう考えている。

「谷口がっこそば」を訪ねた。山形県最上郡金山町。秋田県境に近い金山町の北西の山あい位置する戸数三十六戸の小集落「谷口」。

分校が廃校になる。戦後間もない昭和

二十五年、いわゆる団塊の世代が就学するとき新築した校舎が地域に残る。平成八年三月のことだ。そこで地域の拠り所として親しまれてきた分校の建物を何とか残して、使おうということになり、地区内外の卒業生、町の有志、県外からの応援を受けて、平成九年六月から農村体験学校「四季の学校・谷口」、同年七月から「谷口がっこそば」を始める。いわゆるグリーンツーリズム。交流拠点としての活用をはじめた。

「農村体験学校」は、一泊二日の日程で、年に四回開校される。四季それぞれにある農作業やむら行事を体験し、学校に泊まり交流を図る。そば打ち、草木染



加藤さんの自信と
誇りにみちた笑顔

め、餅つき、雪かき等。「がっこそば」は通常土・日の十一時から十五時まで、学校の中にそば屋ができる。当初のメニューは板そばのみ。野菜、山菜、きのこ、納豆など地域の素材をつかった一品がそばにつく。そばがおいしいことは勿論、このそばにつく一品が人気の秘密。地元の方をはじめ、山形市や仙台市からも大勢訪れ、一年目から年間一万食のそばを売り上げ、スタッフにボーナスまで出るほどに。

とまあ私のつたない文章で書けばそれだけの話なのだが、それを支えているスタッフ、つまり地区の「お母さんたち」に圧倒され、喜ばされ、



分校が生まれた親しき学校として
学校の屋根の赤い
今は地域の学校

元気をもらって帰ってきた。そば屋を運営している六人のお母さんたちだ。私がお話を聞かせて戴いたのは「加藤トキ子」さん。恩師の先生にそばを

研究されている方がおられ、その方の勧めもありそば打ちを始められた。山形県は有名なそばの産地・消費地。当然そばが好きで始めたのかと思いきや、それまでは全く好きではなく、食べることさえまれだったらしい。専門家を東京から呼んで教わり、研究し、試行錯誤の末、実際に自分で打ってはじめてそばをおいしいと感じたという。五ヶ月間研究・試食を繰り返していたが、いつまでも練習ばかりでは先へ進めないと、まだお金をいただいて食べてももらえない味かどうかも自信が持てないままGO!そんなお母さんたちが、どんなに緊張してそば屋を開店

したかは想像に難くない。しかし、もの珍しさもあって、各地から皆が応援団のように集まって来てくれた。都会からのお客さんにも構えず、臆することなく普段どおりに話すことや、媚びることなく接することの難しさと大切さを日に日に身に付けていったのだろう。今は、私たちが食事を終えるや否や、テーブル

ルに近づき、自分の言葉でお話される堂々とした姿と自信に満ちた顔は、訪れた人たちに勇気さえ与えてくれる。また来ようと思わせる。以前に訪問する機会があった長野県浪合村「トンキラ農園」のお母さんたち、内子町の「石畳の宿」を切り盛りする主婦の方たちと姿をだぼらせた。

最初は本当に恥ずかしさでままならず、勇気をふりしぼって外からの人たちを受け入れる。その経験を重ねることにより、交流の楽しさや喜びを感じるようになる。そこで情報を発信し、また情報をもらう。すると自分達で他の場所を訪ね、意欲的に学びあう。そして自分たちの地域の「らしさ」を再確認し自信を深める。谷口ではそんな好循環が生まれていると感じた。ひとつ自分達で踏み込むことで信じられないような力が湧いてくることを感じさせられた。裏返せばそれまで、彼女達にとって外の地域の人たちと交流するといふことがどんなに特別なことと映ってきたことか。彼女達が今までいかに農山村の閉ざされた社会の小さい地域の中で暮らしてきたことか。これからは多くの農山村で、元気なお母さんたちに会える場所がふえはじめるだろう。本物の「交流」ができる場所が期待されている。

研究員レポート

市民参加の まちづくりについて

主任研究員 山下 大成

平成十三年十一月二十一日、高松市において開催された土木学会四国支部主催の研究フォーラム「市民参加による社会資本整備」に参加した。まちづくりセンターの活動内容について発表の依頼があったものであるが、P I（パブリック・インボルブメント…市民参加による公共事業実施）手法について考える良い機会となった。

フォーラムでは、国や各県におけるP I導入の事例報告や、各大学からP I手法の研究結果の発表がなされたが、どこも実験的にP I手法を導入している段階であり、市民参加の在り方を手探りで模

索している状況であった。

しかし、右肩上がりに経済が成長し、潤沢に公共事業の予算がついていた時代と違って、国、地方ともに財政状況が悪化し、これから少子・高齢化が進展する状況下にあつて、今後、限られた予算の中で、本当に地元が必要とし、地域住民が望んでいる社会資本整備を行っていくためには、民意を反映した公共事業の実施が不可欠なものとなつている。

また、公共事業に対する市民の関心の高まりと、行政における情報公開の流れの中で、計画決定プロセスの透明性や公平性の確保の観点からも、こうした取り組みが一層進められていくのは間違いない。

さらに、公共事業の実施に限らず、合併問題を始めとする地域における課題解決に当たっては、行政と市民のパートナーシップが必須のものとなつている。

こうした状況に対して、P Iの手法のように、行政側から、市民の関心を高め、まちづくりへの市民参加を促すような働きかけが必要となるし、市民側からも、まちづくりに対して、積極的に参画（単なる参加にとどまらず）することが求められている。

これからのまちづくりには、一人ひと

りが当事者意識を持つて社会を築き上げていくという、自覚と責任を持った市民社会の形成が時代的な要請となつていることはフォーラムでも発言されていたとおりだ。

そのためには、行政と市民が協働できる仕組み（市民が自分たちの地域をどうするかに関われる仕組み）づくりが必要であるし、同時に、この仕組みをどう運営していくかというソフトの研究も大切になつてくることを今回のフォーラムで実感した。

ただ、注意すべきは、パネリストの若竹まちづくり研究所の島中所长が言われていたとおり、ワークショップを始めとするP Iの導入が行政側の免罪符となつてはいけないという点であり、一時の流行（ブーム）のような取り組みに終わってはならないということであろう。

また、まちづくりセンターとしても、行政と市民の橋渡し役、行政と市民のコーディネーターとなるような人材の育成（又は発掘）という役割が求められていると考えさせられた。

えひめ地域政策研究会議フォーラム2002

テーマ「まちづくりと市町村合併」

—今、地域づくりに求められているもの—

21世紀を迎え、私たちの住む地域は、新たな意思表示を求められています。

「合併」問題です。この合併問題は、「むらおこし・まちづくり」という終わることのない息の長い活動に対して、一つの内省的結論を求めているような気がしてなりません。

それは、いかに足腰の強い地域づくり・人の輝くまちづくりが行われてきたか、住んでよく・訪ねてよいまちになってきたかということであり、大切なことは、こういった思いや試みが「何か」を機会に終わりを告げるのではなく、一つの方向を見つめながら、今までも、そしてこれからも歩み続けることができるかどうかということではないでしょうか。

そんな時期だからこそ、自立的に地域で暮らすことの意味や価値を、そしてそのための「しくみ」を考えていくことが大切だと思います。そのための一助となることを願い、この会を開催いたします。

- と き 平成14年1月19日(土) 13:30~
- と ころ えひめ共済会館(松山市三番町5-13-1)
- 内 容 ○基調講演 I

テーマ:「地元学のすすめ」

講師:吉本 哲郎氏(水俣市農林水産課長)

- 基調講演 II

テーマ:「まちづくりと市町村合併」

講師:藤目 節夫氏(愛媛大学教授)

- フロア討議 今、地域づくりに求められているもの

コーディネーター 近藤 誠氏(研究会議事務局長)

- 参加費 フォーラム1,000円 交流会5,000円(希望者)

- 申し込み えひめ地域づくり研究会議事務局(えひめ地域政策研究センター内)

T E L 089-932-7750 F A X 089-932-7760

E-mail:machicen@mail.netwave.or.jp

平成14年1月11日(金)までに



BOOK INFORMATION

●犬も歩けば赤岡町

風土社 1,200円(税別)

日本で二番目に小さい町高知県赤岡町で、町づくりワークショップを中心とする町民メンバー「赤岡町まちのHOME残し隊」が、町のシンボルとして小さな風呂屋を残すために本を出版。

かの路上観察学会のメンバー四人を含む赤岡探偵団が、赤岡の町の観察を行った模様を詳細に収録した、実況感あふれる「町の探検手帳」。



●郡中町家物語

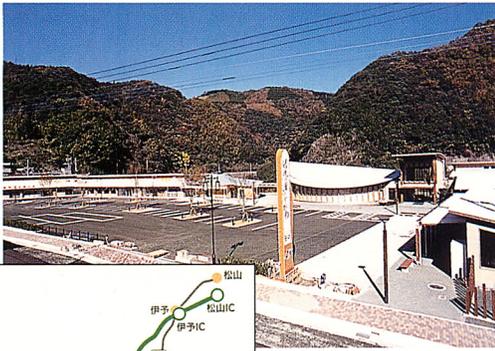
アトラス出版

1,524円(税別)

おそらく日本一と思われる奥行き六十間(約110m)の家々を残すこの町「郡中」(伊予市灘町、湊町)は、民力によってできた町であった。

かつて、県都松山と覇を競った時期もある「郡中」の町の特異な成り立ちと歴史を読み解く歴史探訪記。巻末に、「灘町・湊町散策ガイドブック」も収録。





道の駅 『清流の里 ひじかわ』

肱川町

昨年12月、肱川町に、道の駅「清流の里 ひじかわ」がオープンしました。

この施設は、農産物や特産品の販売施設、交流施設に加え、県内で初めて商業施設を併設した道の駅です。交流施設では、各種展示会や体験・交流会を定期的に開催するほか、一級河川肱川に接しているので、今後、「川」をテーマにした交流活動を行う予定です。

《営業時間》午前8時～午後6時（一部7時まで営業）

《定休日》水曜日

《問い合わせ先》株式会社 清流の里ひじかわ

TEL (0893) 34-2700

海から生まれた健康湯

『はま湯（ゆう）』

明浜町

同じく昨年12月に、明浜町に、塩風呂「はま湯」がオープンしています。

ミネラルを多く含んだ健康に良い海水風呂にのんびりつかった後は、一階のレストランコーナーで美味しい郷土料理に舌鼓を打つ。明浜町の新しい「のんびり」を堪能してはいかがですか。

また、見下ろせば大早津海水浴場、すぐ隣の小高い丘にはオートキャンプ場「きゃんぱ」もあり、塩風呂以外の楽しみ方もいろいろの新名所です。

《営業時間》午前10時～午後10時（礼止め9時）

《定休日》毎月第3火曜日

《問い合わせ先》明浜町役場企画調整課 TEL (0894) 64-1111



印刷／三創印刷株式会社

発行／平成十四年一月一日

（財）えひめ地域政策

研究センター

TEL089(932)7750
FAX089(932)7760

（財）えひめ地域政策研究センター
まちづくり活動部門
（まちづくりセンターえひめ）

〒790-0003

松山市三番町四丁目十番地一

愛媛県三番町ビル二階

編集係までお寄せください。

内容についてのご意見やまち

づくり活動のトピックなどあり

ましたら、お気軽に『舞たうん』

編集係までお寄せください。

（山下）

今年一年を乗り切っていきたいと思っています。

冒険心と謙虚さ、この二つがないと人間は成長しない。」という双海町の若松課長の言葉を肝に銘じて、

今年一年を乗り切っていきたいと思っています。

セクター一年目にして、二十一世紀最初の年も終わり、いよいよ二年目に突入しましたが、「冒険心と謙虚さ、この二つがないと人間は成長しない。」という双海町の若松課長の言葉を肝に銘じて、

今年一年を乗り切っていきたいと思っています。

今年一年を乗り切っていきたいと思っています。